

jdzb echo

日本とドイツ——同じ課題、異なる解決策

ゲルハルト・ヴィースホイ (Gerhard WIESHOU) ベルリン日独センター評議会議長

ドイツ経済は労働市場がフレキシブルで、債務額が低かったおかげで、大きな被害を被ることなくして金融市場の危機を乗り切ることができた。国際労働機関 (ILO) の計算によると、2015年5月の失業率は1991年以降最も低い4.6パーセント、求人数は東西ドイツが統一された1990年以降の最高記録となる57万人に達した。そのドイツとは異なり、日本の経済状況が好転したのは、安倍政権が発足した2012年12月以降のことである。アベノミクスと呼ばれる一連の措置導入後に大幅な円安となり、国内景気が回復した結果、2012年第4四半期から2014年第4四半期にかけて日本企業の収益は30パーセント以上の非常に急激な伸びをみせ、国内総生産 (GDP) 比でみると14パーセント上昇するという新たな記録を樹立した。

通常の場合、持続可能な景気回復の決定打となるのは企業の収益性の高さである。それは、収益が高ければ企業も投資し、新たな雇用を創出するからである。実際日本では稼働能力人口が縮小したにもかかわらず、2012年12月以降に100万以上の雇用が新たに創出され、失業率は1997年以降最も低い3.3パーセントにまで減少した。このような状況を見るかぎり、日本経済の成長見通しは極めて肯定的といえよう。しかしながら、日本では労働力不足が徐々に顕著となりつつあり、2015年5月には求職者1人に対する求人は1.19だった(この値が最後にみられたのは、1992年の平成ブーム時である)。そして、労働力不足が進んだ結果、国民経済論の定石どおりに賃金推移が反転した。すなわち、2012年

12月に1.6パーセントの賃金低下が見られた後、2015年5月に1.0パーセントの賃上げとなったのである。日本社会の高齢化がもたらす課題のひとつが、まさに労働力不足の増大である。

面白いことに、この課題に対する反応として日本政府が選択した道は外国人労働者の移住を強化することではなく、人力(人間の労働力)を代替するロボットに賭けることである。しかしながら、ロボット登用の強化結果が国民経済の統計に反映されるまで、経験上数年を要する。古典派経済学の成長モデルの研究で著名な米経済学者のロバート・ソロー (Robert Solow) は、米国における情報技術革命との関連で、「あらゆる場所においてコンピューター時代の到来を目にするが、生産性の統計において



独日法律家協会と共催した日独会議「カルテル法・独占禁止法にかかわるコンプライアンス」において祝辞を述べるシュテファニー・フービツヒ (Dr. Stefanie HUBIG) 独連邦司法消費者保護省事務次官 (2015年6月15日)

目次

巻頭寄稿文 日本とドイツ ゲルハルト・ヴィースホイ	1~2
インタビュー 吉本バナナ	3
会議報告 第3回思索工房	4
交流事業 日独若手専門家交流	5
その他の事業報告	6
2015年事業案内	7
ベルリンにおけるしむらのいろ	8

は目にしない」と1987年にすでに述べている。生産性の大幅な加速が米国の統計上で顕著になったのは、実に1990年代初頭に入ってからのものであった。したがって、しばらくたてば日本における経済成長の復活が、確実な生産性向上という形で統計に反映されるであろう。

日本政府が直面する二つ目の大きな課題は膨大な国家債務と、社会の高齢化にともなう社会福祉予算の上昇である。2015年の日本の国家債務はGDPの246パーセントに達する見通しだが、対ナポレオン戦争後のイギリスが同規模の国家債務を償還するのに100年を要している。日本政府は堅牢な経済成長へ復帰し、インフレ率を2パーセントの正常レベルに保つことで国家債務を徐々に削減する可能性を得られるであろうが、そのためには日本政府の金利負担を低い水準に保たなければならない。したがって、金利を人為的に低く抑えたままで長年維持することが必要となる。また、国債が主に日本国民の手中にあるため、一回限りの資産税を徴収することで国家債務を大幅に削減する可能性も、日本政府のオプションとして常に存在する。もうひとつのオプションとして、利子所得に対する課税率を引き上げることが考えられる。

ドイツでは金利水準が低く、慎重な財政政策が敷かれたため、国際通貨基金(IMF)の試算による2012年の国家債務はGDPの79パーセントだったのが、2015年は約69パーセントにまで削減される見込みである。しかしながら、ドイツでも日本同様に社会の高齢化が進み、社会福祉予算の引き上げが必要のため、明示的国家債務の他に、年金金庫および疾病金庫の準備金の将来的不足分を充当するためのGDPの約160パーセント相当の内在的な国家債務が存在する。したがって、ドイツでも将来的には高度経済成長が必要となるが、昨今の労働力不足の増大を考えると、これは困難な課題といえよう。もっとも、移民によって労働力不足が軽減される可能性

もある。2014年にドイツに移住した人数は120万人、ドイツから移住していった人は約80万人であった(2014年より多くの人移住してきたのは、1992年だけである)。しかしながら、たとえ継続的に移住があったとしても、持続可能な高度経済成長を担保するには不十分である。したがって、ドイツは日本の例に倣い、すべての経済分野におけるロボット登用強化を促進すべきである。

日本政府はまた、金融投資資産の国際化および幅広い多様化を通じて、年金基金および保険の収益性の向上を目指している。将来的に国からの年金給付を削減せざるを得なくなった場合、日本の年金生活者の多くの重要な収入源となるのは、海外で計上する高めの利益であろう。残念ながらドイツでは、貯蓄の最適な投資方法と積み立て方式の年金基金制度の強化に関する議論はまだ始まったばかりである。

総括すると、日独ともに将来的に少子高齢化という大きな課題に直面しており、現在これらの課題に対処するために異なる方法を選択している。以上を背景に、日独両国が緊密な関係を保ちつづけ、相互に学び合うことが重要である。



ヴィースホイ氏は株式会社B・メツラー・ゼール・ゾーン & Co. ホールディング*のパートナーです。(写真 © Andreas SCHÖTTKE)

*メツラー・グループの主要5部門(資産運用、コーポレート・ファイナンス、株式、為替、プライベートバンキング)を統括するバンクハウス。

「jdzb echo」読者の皆様

本紙第111号(2015年6月)に高島有終ベルリン日独センター総裁およびマティアス・ナス(Matthias NAB)ベルリン日独センター副総裁の退任の挨拶を掲載いたしました。今では新任の総裁として神余隆博前大使、副総裁としてヴェルナー・パッシャ教授(Prof. Werner PASCHA)、そしてベルリン日独センターの新たな評議会議長としてゲルハルト・ヴィースホイ氏(Gerhard WIESHEU)が就任し、それぞれベルリン日独センター事業を含め、運営に深く参画もらっています。

本号巻頭寄稿文でヴィースホイ評議会議長は、日独協力が強化されることが望まれる分野を挙げていますが、少子高齢化をはじめいくつかのテーマはすでにベルリン日独センターの会議系事業で取り上げています。また、9月から10月にかけて日本で日独会議「ダイバーシティが創る卓越性——学術界における女性および若手研究者の進出」および日独シンポジウム「良質の労働を万人に」を開催します。そして、2016年には日独両国で懸案の移民問題を取り上げる予定です。

ベルリン日独センター設立30周年記念事業では、6月に重要無形文化財保持者(人間国宝)の志村ふくみ氏およびご息女の志村洋子氏をベルリン日独センターに招き、プレーハン美術館で開催中の展覧会「KIMONO——志村ふくみと洋子——ジャポニズム」を内容面で補完する形で講演会「しむらのいろ——日出ずる国の色の源泉を探る」および染色ワークショップを開催し、ベルリン市民にあまり知られていない日本文化の側面を紹介することができました。

そして、設立30周年記念事業の秋季ハイライトとして9月に吉本ばなな氏を招き、朗読とトークの夕べを開催します。皆様のお越しをお待ち申し上げます。

フリデリケ・ボッセ(Dr. Friederike Bosse)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミハエル・ニーマン
(Michael NIEMANN)
E-Mail mniemann@jdzb.de

本紙「jdzb echo」はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後6時です。蔵書借り出しも可能です。

本年9月9日から19日にかけて、第15回ベルリン国際文学祭が開催されるにあたり、ベルリン日独センターは同文学祭の主催機関と協力し、吉本ばなな氏と小野正嗣氏をベルリンに招聘いたします。2014年下半期の芥川賞受賞者小野正嗣氏の文学イベントは9月13日にベルリン国際文学祭において開催され、吉本ばなな氏による文学イベントは9月15日にベルリン国際文学祭にて、また翌16日は当ベルリン日独センターにおいても開かれる予定です。

吉本氏は、大学卒業後に喫茶店でアルバイトをしながら執筆した『キッチン』が、1988年に刊行されるといきなりミリオンセラーとなりました。以来、発表された数々の作品はとくに多くの若い女性たちの支持を集め、「吉本ばなな現象」を引き起こしたほどです。それから30年近くを経た現在では、その人気は海外へも広がり、30ヶ国以上で翻訳出版されています。いまや吉本ばなな氏は国際的に知られている日本人作家としてすっかり定着しているといえるでしょう。本紙は、このたびの訪独を控えた吉本氏のドイツに対する思い等を伺いました。

編集部: 吉本さんにとってドイツとはどのようなイメージでしょうか。また、9月半ばの訪独を控え、どのような思いを抱えていますか。

吉本: 全く未知の国ですが、友人である奈良美智さんが在住していたことから、親しみがあります。また、アートに関して懐の深い国だという印象があります。今回はたった3日間しかいられないのでその一端にも触れられないように思いますが、とても楽しみにしています。

編集部: 吉本さんの作品は世界各国で翻訳されており、日本国内のみならず、海外でも大きな支持を得ていますが、その理由は何だと思えますか。またアジア、ヨーロッパ(そのなかでもラテン系の国とそうでない国)、米国など、国によって読まれ方・反応の違いはありますか。ドイツの読者の傾向は。

吉本: 私にとってはドイツの読者も全く未知であります。

私の作品はふだん人が生活の中に置き去りにしている感受性を慰めるものです。それによってなんらかの癒しが起きるように思います。特に孤独を感じ生きづらい人にとって、よりどころになる美しい作品を書きたいと願っています。このようなことは万国共通なので、ある種の人たちが国境を越えて私の作品を読んでくれるのでしょう。

アジアの人たちには気候が似ていることから、特に自然描写を理解してもらいやすい気がします。

編集部: 南洋のきれいな海辺・島のリゾート地をよく訪れていらっしゃるようですが、そうした滞在先で作品のインスピレーションを受けることはよくありますか。それとは対照的なドイツで作品のインスピレーションを受けることは考えられますか。

吉本: たいていの場合仕事で訪れる場所なので、その時々の仕事に夢中でインスピレーションを受けるほどにゆっくりすることができないことはなかなかないです。

ただ、作品に出てくるようなことが、いつどこからやってくるのかは全く予想がつきません。退屈して眠くて疲れ果てていた空港の風景が突然小説を書いているときに浮かんでくることもあります。なので、どこにいても創作の源は待っていると思って差し支えがないと思います。初めての国に行くときはいつも気持ちがよりオープンになっているので、ドイツに行くことはとても楽しみです。

編集部: 20代でいきなりベストセラー作家になってしまったことのメリットとデメリットは何でしょう。30年近く経った今、振り返るとどんな思いがよぎりますか。これからどんな作品を書いていきたいですか。

吉本: メリットは若いときに自分の体験を増やすためにお金を使うことができたことです。デメリットは有名になったことでひそかな取材がしにくくなったことです。また、お金がたくさんあるとわかってしまったことで、人間関係がギクシャクしたことです。企業のトップや土地を持っている人に比べて作家の稼ぎなどたかがしれてい



写真 © SAWA Fumiya

るのですが、やはり有名人イコールお金持ちというイメージが日本には特にあるようです。

ずっと小説を書いてきましたし、これからも書いていきます。その時々時代が求めている癒しの形を描き、人々の自己発見を手伝っていきたいです。

編集部: 母親になったことで、作品(ソフト面)や仕事ぶり(ハード面)にどのような影響が出ましたか。

吉本: 作品では安易に人を殺さなくなりました。より深い愛情や忍耐が描けるようになったと思います。

ハード面ではとにかく時間が足りなくて仕事を細切れにするので、集中するのがたいへんになりました。

編集部: 締切りがあって書けないうちに、書けないときはどうしていますか。あるいは、そんなことはないのでしょうか。お決まりの打開法・気分転換法などはありますか。

吉本: 書けないときはありません。もし書けないときがあったらプロにはなれなかったか、30年もプロでいられたらいいのですが、料理は手を動かすのがいいみたいです。散歩は私の場合いつそう作品のことを考えてしまうので、あまり合っていないみたいです。

第3回思索工房「21世紀における日本——変遷過程中的の社会」発表会

ローレンツ・デニング(Lorenz DENNINGER)

ベルリン自由大学大学院東アジア研究科付き助手

第3回思索工房「21世紀における日本——変遷過程中的の社会」の研究発表会は、2015年6月30日にベルリン日独センターを会場に開催された。ここで、本発表会をもち成功裏に幕を閉じた思索工房「日本」を振り返りたい。

思索工房(Denkwerk)は、高等学校と大学間のネットワークの強化を目指し、大学進学後の高校生がスムーズに学生生活に移行できるよう支援するロバート・ボッシュ財団の事業であり、その資金も同財団が拠出している。ベルリン自由大学のブレッヒンガー＝タルコット教授(Prof. Dr. Verena BLECHINGER-TALCOTT、日本学部政治・経済担当)が日本関連の企画で本事業(思索工房)に応募し、いわば工房長となったのは2013年のことである。ロバート・ボッシュ財団からは3年にわたる助成を得、2015年6月の発表会で思索工房「日本」は終了した。

ベルリン自由大学が実施した思索工房「日本」は、とりわけ二つの目標を掲げてスタートした。ひとつは高校生に日本関連の専門知識を付与すること、もうひとつは論文執筆・学会発表の「いろは」を教えることである。思索工房の中核を成したのは、高校生(日本の高等学校2年生に該当する11年生)と、学生チューターの共同活動である。この3年間、思索工房「日本」に生徒を派遣したのはベルリン在のカニジウス・コレーク高校およびメランヒトン高校で、総計34人の高校生が参加した。また、チューターとしてはベルリン自由大学日本学部から15人の在校生が参加した。

ロバート・ボッシュ財団が目指した「高等学校と大学間のネットワークの強化」は、様々なレベルで成功裏に実現された。高校生に対する学生チューターによる包括的サポートの場として定期的に会合ももたれたのみならず、大学の内外でも様々なプログラムが組まれていた。まず、毎年秋に、参加高校生がベルリン自由大学を訪問するキャンパスデーを実施した。日本学部の講師が各々の専門分野から短い講演を発表した後に、高校生同士で内容を掘り下げて討議した。その後、大学生によるベルリン自由大学のキャンパス案内があり、日本学部の図書館を視察し、学生食堂にも足を運び、大学生の日常生活がどのようなものか垣間見る機会となった。

冬には高校生とチューターと一緒に様々な学術系講演会に出席した。たとえば、在独日本国大使館で開催された講演会では、日本に関する知識を深めることができた。また、ドイツ最大の日本文献収集を誇るベルリン国立図書館訪問時には館内案内のみならず、東アジア部担当の司書から日本関連事項の検索の可能性および検索方法を学んだ。

このように、思索工房「日本」では一年の間に様々な研修を実施し、その閉めとなるハイライトとして研究発表会を実施してきた。発表会に向けて高校生は自分で日本関連のテーマを選択し、個人研究ないしはグループ研究の形でレポート発表またはポスター発表を準備した。その際、学生チューターの支援を得る以外にも、ベルリン自由大学日本学部の講師や助手からの助言も得られた。このようにして、3年の間に、日本に関連する幅広いテーマで様々な研究レポートが作成された。過去2回同様に、最終回となった2015年もベルリン日独センターの協力を得て、同センターを会場に実施された発表会は、高校生が実際の学会の雰囲気を知る良い機会であった。それぞれの研究・リサーチ結果を発表する短いプレゼンテーションのために高校生は自ら壇上に立ち、ポスターあるいはパワーポイントを用いて口頭発表し、その内容について招かれた学者・研究者やベルリン自由大学の学生と討議し、その様子を高等学校の担任教師や同級生が観客席からみている——これは高校生にとって格別な体験であり、進学意欲をかきたてるものであった。

高校生の発表につづいて著名日本学者による専門的な講演もあった。高校生の研究レポートは押しなべて高いレベルにあり、ベルリンで開催される「学術ロングナイト」*にベルリン自由大学が参加した際に発表されたグループ研究もあった。

ベルリン自由大学の思索工房「日本」は、大きな成果を挙げた。参加した高校生は、日本に関する重要な知見を得、大学レベルでテーマを取り扱う方法——有意義なテーマ設定から、人文科学的・社会科学的考察を一步一步進める方法まで——を現場の人から直接学ぶことができた。また、チューターとして参加した大学生は、学ぶ立場から教える立場にたつ役割反転を体験することで責任感が養われ、新鮮な視線から自分の研究分野を捉える貴重な経験を得た。

この場を借りて、思索工房にご協力いただいた全ての関係者に感謝する。まず、資金助成を通じて、思索工房の実現そのものを担保していただいたロバート・ボッシュ財団。つぎに、カニジウス・コレーク高校およびメランヒトン高校、なかでもカイルバッハ先生(Inessa KEILBACH)とベルント(Maya BERNDT)先生には種々調整の労をとっていただき、感謝する。また、在独日本国大使館、ベルリン国立図書館、そしてもちろんのことベルリン日独センターにも御礼申し上げる。

*ベルリンの様々な学術系機関(大学、研究所、博物館、病院、他)が一般の人に門戸を開き、その事業を紹介したり、科学技術を楽しんでもらうイベント。2015年は6月13日の17時から24時にかけて実施され、2016年は6月11日に実施予定。



日独若手専門家交流に参加して(2015年6月25日～7月6日) 酒井恭輔、北海道大学電子科学研究所

15年以上の歴史をもつ日独の若手専門家交流の2015年度版が「再生可能エネルギー(特に発電)分野」をテーマとして開催された。日本からの参加者は計6名。その所属は、大学、国立研究開発法人、エネルギー財団、企業と多様であり、各分野独自の視点から多角的に情報交換が行われた。ここでは、参加メンバーの一人として、今回の訪問で感じ、発見したドイツのエネルギー政策の転換(Energiewende)に関する情報を紹介したい。

まず驚かされたのが、何処に行っても語られる長期目標である。「2050年には、'90年比でCO₂排出量を80パーセント上削減する」。広く認識された目標と合理的な計画が印象的だった。

その戦略は緻密に設計され、初めて耳にした場合でも納得できる明快なものであった。簡単に紹介すると、①省エネ、②効率的なエネルギー利用、③再生可能エネルギー(再エネ)の導入を三本柱とし、エネルギー消費を半減させ再エネの割合を高めるというものである。

寒さの厳しいドイツでは、電力や輸送燃料に加えて、熱もエネルギー消費の大きな要素である。熱として失われているエネルギーの有効利用が重要で、建物断熱の強化(省エネ)や発電施設の熱電併給への転換(効率的なエネルギー利用)が進められている。また、市街地での車やバスのエネルギー利用効率が高いことに着目し、自転車や電気自動車、路面電車への転換を進めている点も興味深かった。訪問先のひとつでは、こうした転換に係る経済的負担を計算し、化石燃料を使いつづける場合の半分程度になると試算していた。この経済合理性も、ドイツのエネルギー政策の転換の特徴であろう。

合理的な計画は、研究活動にも見られた。研究予算は、社会への還元が早く大きいエネルギー技術から優先的に傾斜配分されていた。応用研究の枠組みでは、企業との共同研究が前提とされ、社会への還元を明確に意識していた。一方、未来の技術に関しては、基礎研究の枠組みで別予算が充てられる仕組みになっていた。課題解決と基礎科学とが、予算上は明確に区別されている印象を受けた。

応用研究の代表施設であるフラウンホーファー応用研究振興協会所属の各研究所では、非常に実践的な内容の研究が行われていた。太陽電池の量産ラインの歩留まり向上の研究や洋上風力発電の基礎(土台)へ

波が与えるダメージの研究など、製品開発に直結した内容である。技術の成熟に不可欠だが、個別の組織ではコストが掛かりすぎるこうした研究に国の予算を配分し、関係各者が協力して取り組む姿勢に、日本も学ぶものがあると感じた。明快な長期目標と戦略の共有が、こうした協力体制の基盤となっているのだろう。

訪問先には、研究施設に加えて、エネルギー政策の転換を進める非営利団体(NPO)や送電会社、まちづくり現場も含まれ、変化を生み出す活動を肌で感じる機会に恵まれた。地域に根付いたNPOは現在、持続可能社会の実現を目指すリーダーとして、欧州連合(EU)や連邦政府、自治体へコンサルタント業務を行い、技術と社会を結ぶ架け橋となっている。自治体は、その意見を参考にしながら、関係各者と密に協力し「まちづくり」を行っていた。いくつかのまちづくり現場の視察で気付いたのは、環境に配慮し住民を幸せにする思想を根底にもつ点である。通勤時間の短いコンパクトシティ、身近な公共交通、車を気にせず遊べる道路、水と緑あふれる憩いの場やカフェ・レストランの充実。パッシブハウスや地域暖房などエコ・エネルギーは、こうした「まちづくり」の一環である。見学した町の人々の活気や明るい雰囲気非常に印象的であった。こうした町は地域の資産であり、地域の銀行には安心な投資先、不動産や店舗には優良なビジネス地域、自治体には安定した税収源になるといえる。良い「まちづくり」は、地域全体を幸せにするのである。

発送電の分離したドイツでは、送電会社は送電システムの安定化と再エネ電力の買い取り補償を業務とする。ドイツ東部を管轄する会社では、再エネ割合は42パーセントまで達したという(2014年)。今後も増加を続ける再エネ割合に関して、80パーセントになっても安定運用は可能だと言い切る担当者の意気込みに、日本における発送電分離の必要性を強く感じた。

例年同様、非常にタイトなスケジュールの中、七都市を踏破した濃密な交流事業となった。訪問地は、フライブルクやハイデルベルクの開発地区、独連邦教育研究省、フラウンホーファー応用研究所を始めとする研究施設・大学六ヶ所、環境エネルギーNPO二ヶ所、フォルクスワーゲン社、50ヘルツ社と多岐にわたり、いずれの訪問地においても温かい歓迎を受け、よく準備された説明や我々の質問に対する丁寧かつ明快な回答に、ドイツの方々の真摯さと人柄の良さを感じ、充実した時間を送ることができた。文化的な要素も随所にちりばめられており、旧市街や川辺の散策、ビールやワインとドイツ料理の数々が疲れた体を回復させ、ベルリンオペラは新たな刺激を与えてくれた。研究・文化両面を実体験し大満足である。

最後に、非常に有意義かつ貴重な経験のできる本事業を企画・運営する日独両政府の関係各位、ベルリン日独センターの皆さま、我々の訪問を快く受け入れて下さった機関の皆さま、思い出深き本旅行に同行していただいた皆さま、我々を温かく送り出してくれた日本の皆さま、そしてドイツ滞在中に出会ったすべての方々に対し、心からの敬意と感謝を申し上げるとともに、本事業の継続を祈念して、本報告を終了する。





8月4日から6日にかけてインテックス大阪を会場に開催された平成27年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会に今年もユース・イン・サイエンス (Youth in Science) 財団、ドイツ金属電子産業使用者団体連盟 (金属総連) およびベルリン日独センターが協力して、ドイツの理数系高等学校の生徒6名、教師3名を派遣しました。(写真 © MINT-EC)



ベルリン自由大学大学院東アジア研究科と協力して実施した国際シンポジウム「日本と東アジアにおける食の安全と消費者保護」は、ベルリンの2015年アジア太平洋ウィークの登録事業として開催しました (2015年5月18日～19日)。



今年もドイツアジア学会の年次総会がベルリン日独センターで開催されました (2015年6月28日～29日)。総会に併せて実施する学会のテーマは「アジアの台頭とドイツにおけるアジア研究の現状——批判的現状調査」で、ドイツアジア太平洋ビジネス協会の協力も得ました。なお、本会議はベルリンの2015年アジア太平洋ウィークの登録事業です。



2013年にベルリンで開館された德国墨卡托中国研究中心 (ドイツ・メルカトル中国研究センター) との初の協力事業として、専門家シンポジウム「中国・ドイツ・日本におけるエネルギーシステムの移行」を開催しました (2015年6月9日)。



2015年のオープンハウス (6月20日) では新たな趣向として、ベルリン在アーティスト三家俊彦によるワークショップ「アルミホイルで作品を作ろう」を実施しました。参加者は三家の指導の下、架空の生き物や動物の制作に挑戦しました。

もうひとつの新趣向はハノーファー在の上田宗箇流家元正教授中本洋世による「和菓子と茶道」のワークショップで、自然の素材のみを用いる製菓がベルリン市民に伝授されました。

どちらのワークショップも極めて好評で、旧来のイベントにも大勢の市民が参加し、2015年オープンハウスも大盛況のうちに幕を閉じました。



会議系事業



国際社会における日独の共同責任

日独会議「海外安全保障ミッション」
協力機関：コンラート・アデナウアー財団（ベルリン）、公益財団法人世界平和研究所（東京）
2015年9月30日、東京開催

日独安全保障官民ワークショップ
協力機関：独連邦外務省（ベルリン）、日本国外務省（東京）
2015年10月29日～30日、東京開催

国際会議「東アジアとヨーロッパの財政金融統合——国際的な金融危機は地域の統合を促進したか」
協力機関：ドイツ世界・地域研究所（G I G A）アジア研究所（ハンブルク）、アジア開発銀行研究所（東京）
開催予定日：秋、東京開催

エネルギーおよび環境

日独シンポジウム「都市計画——エネルギーが安定供給される、自然環境に配慮した、回復力ある都市づくり」
協力機関：社団法人気候同盟（フランクフルト）、名古屋大学、ドイツ連邦環境自然保護建設原子炉安全省（ベルリン）
2015年11月5日、東京開催

少子高齢化社会

日独シンポジウム「良質の労働を万人に——家族はなぜ良質な労働を求めるのか」
協力機関：ギーゼン大学、筑波大学
2015年10月23日～24日、筑波および東京開催

国家、経済、社会

日独会議「ダイバーシティが創る卓越性——学術界における女性・若手研究者の進出」
協力機関：国際交流基金（東京）、日本学術会議（東京）
2015年9月4日、東京開催

日独シンポジウム「日本とドイツにおける貧困への取り組み」
協力機関：法政大学、イェーナ応用科学大学、在独日本国大使館（ベルリン）、イヤップ国際ユースワーク専門機関（ボン）
2015年9月5日

日独シンポジウム「日本とドイツにおける構造改革の未来」
協力機関：富士通総合研究所（東京）、ドイツ経済研究所（ケルン）
2015年9月8日、東京開催

日独シンポジウム「東アジアとヨーロッパそれぞれの地域安定および地域内協力」
協力機関：ロバート・ボッシュ財団、日独ヤングリーダーズ・フォーラム同窓会
2015年9月11日、東京開催

日独会議「リスク」
協力機関：ドイツ日本研究所（東京）
2015年11月24日

諸文化の対話

日独会議「第二次世界大戦の終戦70周年——政治論議にみる核兵器使用に関する記憶」
協力機関：ベルリン自由大学大学院東アジア研究科、フリードリヒ・エーベルト財団（ベルリン）
2015年10月16日

特別事業

日独フォーラム第24回全体会議
協力機関：独連邦外務省（ベルリン）、日本国外務省（東京）
2015年10月28日～29日、東京開催

文化事業

ダーレム音楽の夕べ

日独若手音楽家による室内楽演奏会
2015年10月14日、19時30分

展覧会

エーファ＝マリア・シェーン＆鈴木七恵（絵画と写真）二人展「見立て」
オープニング：2015年8月26日
展示期間：2015年8月27日～10月15日

村山伸彦絵画展
オープニング：2015年11月20日
展示期間：2015年11月23日～2016年1月末

第15回ベルリン国際文学祭

小野正嗣「九年前の祈り」朗読＆トーク
2015年9月13日、18時
会場：Haus der Berliner Festspiele
(Schaperstraße 24, 10719 Berlin)

小野正嗣&オマール・アクバル（建築家）対談「都市の未来」
2015年9月13日、20時
会場：Literaturhaus Berlin
(Fasanenstraße 23, 10719 Berlin)

吉本ばなな「もしも下北沢」朗読＆トーク
司会：クヌート・エルスタマン
2015年9月15日、18時
会場：Haus der Berliner Festspiele
(Schaperstraße 24, 10719 Berlin)

「作家吉本ばななに聞いてみよう」
対象：ベルリンの中・高等学校生徒
2015年9月16日
会場：ベルリン日独センター

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
日独青少年指導者セミナー
日独勤労青年交流プログラム
日独学生青年リーダー交流プログラム

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時
金曜日10時～15時30分

ダーレム音楽の夕べの申込み受付開始日は追ってお知らせします。

会場について別途記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは www.jdzb.de → 個別事業



志村ふくみ・志村洋子講演会「しむらのいろ——日出ずる国の色の源泉を探る」

2015年6月17日、ベルリン日独センター

志村ふくみにとって、シルク、そして植物や果物から得られる染料は、染めものおよび織りもの芸術の原点であり、インスピレーションとなります。この伝統的な職人技を発展させてきた努力と貢献により、志村ふくみは1990年に「人間国宝」に認定されました。

ベルリン日独センターにおける本講演会では、志村ふくみとご息女の志村洋子が染色と織の世界を紹介しました。

本講演会は、ベルリンのプレーハン美術館にて開催された展覧会「KIMONO——志村ふくみと洋子——ジャポニズム」(2015年6月19日～9月6日)に合わせて実施されました。同展覧会では、志村ふくみと志村洋子の作品が、ユーгент・シュティールのオブジェや写真、グラフィック作品とともに展示されました。

また、関連企画として、2015年8月28日に、ベルリン日独センターにて武田佐知子(追手門大学教授)による講演会「KIMONO——古代から現代までの変遷と日本文化の特質」を開催いたしました。



ベルリン芸術大学の染色実習室で実施したワークショップの様子。志村ふくみ、芸大講師と参加した学生たち。



ワークショップで染めたショール